成人期のなかまたちが教えてくれること

第2回
見方を変えると見えてくる？

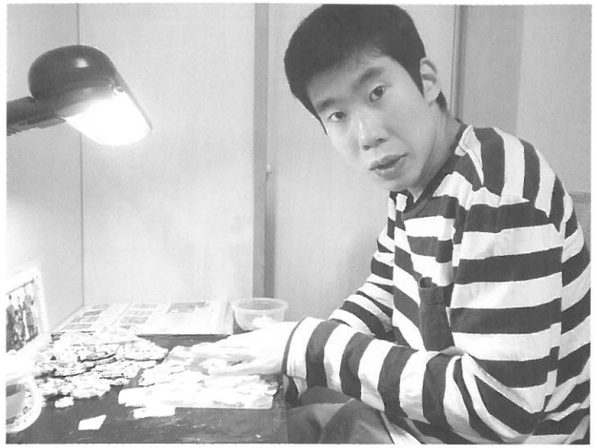
滋賀大学　白石恵理子

しらいし　えりこ／1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。おもな著書に『一人ひとりが人生の主人公』『しなやかにしたたかに仲間と社会に向き合って』『保育・教育のための発達診断』（共著）（いずれも全障研出版部）『人間発達研究の創出と展開―田中昌人・田中杉恵の仕事を通して歴史をつなぐ―』（共著）群青社など多数。

4月号で、発達をとらえるとは、目の前の子どもやなかまが何に心を動かし、何を喜び、何に怒りやせつなさを感じているのか、そこに心をよせていくこと、すなわち「本人さん」の目線で考えることではないかと書きました。そして、「本人さん」の目線で考えることによって、行動の裏に隠れた本当のねがいに気づくことがあると…。しかし、本当のねがいに気づくことや、発達のねがいを大切にすることは決して容易なことではありません。今回は、子どもやなかまをとらえるまなざしについて考えたいと思います。

障害理解のまなざしと発達理解のまなざし

大津市の保育園で、扇風機の大好きな自閉症児がいました。療育を経て3歳児から保育園に入園したのですが、いつも天井の扇風機や換気扇ばかりを見ています。羽が規則正しくクルクル回るのを見つめることで大きな安心を得ていたのでしょう。先生たちは、それが自閉症児のみせる「こだわり」の一つであり、無理にやめさせるものではないことを理解していました。そして、扇風機以外にも興味をもってほしい、少しずつでも友だちに関心をもってほしいとねがっていました。しかし、他のあそびを用意して、そこに関わってくれたように思えても、ふと気づくと、彼はやはり扇風機の下に行っています。なかなかあそびが広がっていかないことに悩んでいました。



職員会議でも、そのことを報告したところ、「こだわり」をなくすことばかりを考えていないだろうかという意見が出たそうです。会議をうけ、3歳児のクラス担任でもう一度、日ごろの保育を見返しました。そのなかで、そういえば、「扇風機ではなくて、こっちで遊ぼう」とばかり働きかけていたなあ、保育者も「こだわり」にこだわってしまっていたなあと気づきます。結果的に彼が友だちのあそびに興味を示し始めたのは、みんなでドラえもんごっこをしたときでした。頭の上に手作りの〝タケコプター〟をつけることで、ドラえもんになってあそぶ子どもたち…3歳児にとって、楽しいごっこあそびになります。自閉症の彼は、ごっこのイメージをもつことは難しかったのですが、大好きな「クルクル回るもの」をみんなが頭につけているのですから、こんなにうれしいことはありません。そこから、少しずつ友だちのあそびに目を向けるようになっていきます。

このエピソードは何を意味しているのでしょうか。

扇風機や換気扇ばかりを見つめていることに対し、単に「ちょっと変わっている」とか、「この子の個性だ」と見るだけでなく、自閉症という障害からくる「こだわり」だと見ることは大切なことです。保育園という新たな生活に不安をいっぱい抱えているからこそ、規則正しく回るもので安心する。障害のない子よりもとてつもなく大きな不安を抱えやすいこと、予測の難しい友だちの動きよりも、クルクル回る羽の動きの方が安心できるということを正しく理解し、寄り添っていくことが求められます。一方で、その行動を発達的にとらえると、彼は不安な気持ちとたたかっているのだという見方、扇風機は「外の世界への入り口」だという見方、「新しい生活に向かうための〝心の杖〟」だという見方になります。

これは、「扇風機をじっと見る」という行動に対し、障害理解という観点からの見方と、発達理解という観点からの見方の違いということもできると思います。障害理解とは、子どもの抱える困難や不安の背景を科学的にとらえることであり、単に「わがまま」や「自分勝手」と見てしまわないということ